

●シリーズ●わが町の文化財へ57

県重要文化財 紙本墨書大般若経

しほんぼくしよだいはんにやきよう

昭和29年9月29日指定

この大般若経は、南北朝時代の永和4年(一三七八)の写本で、縦29.28cm、横11cm、600巻中393巻が伝えられています。備後国御調郡三原(現在の三原市)の金剛寺のために沼田庄内各寺(三原市本郷町・旧豊田郡)で永和3(一三七七)年から5(一三七九)年にかけて分担書写されたもので、現存状態は良好なものです。

大願主は金剛寺の源恵で経文奥書に室町時代初期の三原の地名の記述や、永寿寺において文政14(天保2年・一八三二)年から修復が行われたとの記録があります。

中世における禅宗寺院の信仰の一端がうかがえる貴重な文化財です。



●シリーズ●わが町の文化財へ58

世羅町指定重要文化財 宝篋印塔

ほうきよういんとう

昭和61年10月20日指定

長田篠村谷の山中に、長径10m、短径2mばかりの高まり(古墳の墳丘か)があり、その上に石質良好の花崗岩製の宝篋印塔が一基造立されています。

全高1.19m、相輪は長さ51cmで、途中が折れている外は完存しています。笠部は笠幅31.3cm、上部は六段に造られており、塔身は幅18cm、高さ16.5cm、四方に胎藏界四仏の種子(梵字:古代インドのサンスクリット文字)が浅く陰刻されています。また、基礎は二段式で、高さ24cm、幅37cm、四方に格狭間こうざまが設けられています。

造立の時代は、形式から見て、室町時代前期から中期にかけてと思われる。『世羅郡誌』によると「篠」の地名は、三原市大和町篠(元世羅郡篠村)の飛郷であると言われており、和気氏の丹波桑田郡篠村の名に寄せたものとされています。この付近に仏堂、小祠もあり、丘の下に本篠村という家があつて、昔より毎年大晦日の夜、火縄火を携えて、この宝篋印塔に参拝する遺風があつたとされています。

